

サウロからパウロへ

—トーマス・マンとマクシミリアン・ハルデン—

Von Saulus zu Paulus

—Thomas Mann und Maximilian Harden—

千田まや

Maya CHIDA

2004年10月5日受理

第一章

トーマス・マンの新しい全集

2002年、トーマス・マンの大フランクフルト版全集（注釈付）—作品・書簡・日記—(Große kommentierte Frankfurter Ausgabe—Werke-Briefe-Tagebücher) 全38巻の刊行が始まった。この全集は、注釈本を1冊と数えれば全58冊にも及ぶ大全集で、ドイツはもとより、アメリカ、スイスに手稿、あるいはファクシミリの形で保存され、過去の全集には収録されなかった著作物も収録、実証的研究をふまえた詳細な注が付されている。まだごく一部しか公刊されていないが、「論集 (Essays) I—VII」の中で最初に刊行された「論集II」の充実ぶりが目を惹く。1993年に同じフィッシャー社から刊行された「トーマス・マン論集 (Thomas Mann Essays)」全6巻の、同時期の著作の収録数と比べてみると、1914年から1926年に出たマンの著作物のうち、「トーマス・マン論集」に収められたものは56編、今回の大全集に納められたものは、その倍近い106編に及ぶ。特に、注釈本に『ゲーテとトルストイ』執筆のための覚書が収録された意義は大きい。マン本人によって1922年から1932年までの日記が焼却されたため、第一次大戦中の『非政治的人間の考察』における民主主義批判から、1922年の『ドイツ共和国について』における共和国支持へと、マンがいかなるプロセスを経て思想的転換を遂げたか、実証的に跡付けることはこれまで困難であった。この最も興味深い時期を含む1921年から1925年の間に書き換えが行われた評論『ゲーテとトルストイ』の覚書が収録されたことは、今後のマン研究に大きな進展をもたらすに違いない。

マクシミリアン・ハルデンに関するマンの2つの草稿

しかし、本論ではそれよりも、今回初めて全集に収録された2編のごく短い文章の方に注目したい。1916年に未完成の草稿の形で残されたまま、過去の全集には収録されなかった『ハルデン (Harden)』と、1921年にハルデン宛の手紙に付された『マクシミリアン・ハルデンの60才の誕生日に (Maximilian Harden

zum 60.Geburtstag)』である。これら2編は、1996年のアリアーネ・マルティン編集の書簡集「フランク・ヴェーデキント、ハインリヒ・マン、トーマス・マン。マクシミリアン・ハルデンとの往復書簡 (Frank Wedekind, Thomas Mann, Heinrich Mann Briefwechsel mit Maximilian Harden)」⁽¹⁾で初めて公にされ、今回の「論集II」に収録される運びとなった。雑誌「未来 (Die Zukunft)」の編集者で、オレンブルク事件では、ヴィルヘルム二世の側近を辞職に追い込むほどの社会的影響力を持ち、若きマン兄弟やヴェーデキントを世に送り出し、マンの義母とも親しかったハルデンが、マン研究者の間でこれまでほとんど注目されてこなかったのは、不可思議としか言い様がない。しかし、マルティンがコブレンツの連邦図書館に残されたハルデンの遺品に着目し、1996年にヴェーデキント、マン兄弟とハルデンの往復書簡集を刊行、さらに、マンの義母ヘドヴィッヒ・プリングスハイムの彼宛の28通の書簡を手がかりに、マン兄弟やプリングスハイム家と彼との交流を1998年トーマス・マン年鑑 (Thomas Mann Jahrbuch) 11号掲載論文『義理の息子兼作家—ヘドヴィッヒ・プリングスハイムのマクシミリアン・ハルデン宛書簡におけるトーマス・マン (Schwiegersohn und Schriftsteller—Thomas Mann in den Briefen Hedwig Pringsheims an Maximilian Harden)』⁽²⁾で明らかにするまで、マン研究において、ハルデンは完全に見過ごされていた。その後、ヘルガ・ノイマンとマンフレート・ノイマンによるハルデン研究『マクシミリアン・ハルデン』(2003年)⁽³⁾でハルデンとマン兄弟との関係が取り上げられ、大全集の「論集II」にハルデンに関するマンの2つの草稿が収録されたのは、マルティンの研究の成果と言えよう。

マクシミリアン・ハルデンは、第一次大戦前カール・クラウス、アルフレート・ケルと並ぶ批評家と目されていた人物だが、邦訳文献がほとんどないためか日本では知られていない。そこで、ここでまず、マルティン、ヘルガ・ノイマン、マンフレート・ノイマンの研究をふまえて彼について簡単に紹介し、次にトーマ

ス・マンとマクシミリアン・ハルデンの接点をまとめ、最後に、続く二章、三章で論証すべき点を整理しておく。

マクシミリアン・ハルデンについて

マクシミリアン・ハルデン (本名フェリークス・エルンスト・ヴィトコフスキ Felix Ernst Witkowski) は、リベラルな社会主義者であるユダヤ人商人の7男として1861年ポーゼンに生まれた。16歳でキリスト教に改宗し、以後、尊敬する俳優の名と政治家ハルデンベルクの姓を組み合わせマクシミリアン・ハルデンと名乗る。ギムナジウム中退後、ベルリンで俳優として活動したが、1888年から「ベルリーナー・ターゲブラット」など各紙に投稿。劇評、文化論、政治論、小説、詩などを書いた。彼の目標は、「フォス新聞」に劇評を書いたフォンターネであったという。1892年、雑誌「未来」創刊。カール・クラウスの「ファッケル」に匹敵する影響力を持ったこの雑誌は、最盛期の1910/11年には、23000冊が売れた。1900年代から第一次大戦勃発までの時期、若きマン兄弟やヴェーデキント、マックス・ラインハルトはハルデンの影響力の恩恵に浴す。また、ヒスマルク崇拜者であったハルデンは、宰相や憲法を無視して内政・外政に干渉する皇帝ヴィルヘルム2世を批判、オイレンブルク事件の火付け役となった。当然、創刊後の2年間だけで5回も告訴され、1898年、1901年には禁固刑に服した。1907年の発禁処分に対してはマン兄弟らも抗議声明を出している。しかし、第一次大戦が始まると、彼は『戦争 (Der Krieg)』⁽⁴⁾ 『われわれは勝たねばならぬ (Wir müssen siegen)』⁽⁵⁾ 等、戦争を支持するアピールを発表し、反戦論者ハインリヒ・マンと疎遠になった。ところが1916年春には『私もしウィルソンだったら (Wenn ich Wilson wäre)』⁽⁶⁾ 『真のウィルソン (Der wahre Wilson)』⁽⁷⁾ 『平和のための戦争 (Krieg um Frieden)』⁽⁸⁾ 等の反戦論を展開、今度は『非政治的人間の考察』において、「文明の文士」兄ハインリヒやロマン・ロランら反戦論者を攻撃していたトーマス・マンとの関係が悪化する。以後彼は1918年まで各地で反戦を訴える講演を行い、演劇的才能を発揮して大勢の聴衆を魅了した。彼とは立場を異にすることになったトーマス・マンだが、大戦中も「未来」の購読は続け、義母が後援者となっていたハルデンのミュンヘン講演にも出席した。⁽⁹⁾

1897年からハルデンと交友関係にあり、1921年に復興相、1922年に外務大臣に任命されたヴァルター・ラーテナウと比べると、第一次大戦後のハルデンはどの党派からも孤立し精彩を欠く。彼はヴェルサイユ条約に異議を唱えて米仏を批判する一方、カップ一揆を批判して保守派には祖国の裏切り者とみなされた。しかし1921年ハルデン60歳の誕生日には、ハインリヒ・マン

やアルフレート・デーブリン、クーデンホーフ・カレルギー、シュテファン・ツヴァイクら著名人が記念論集の出版を計画するなど、その存在は決して忘れられたわけではなかった。トーマス・マンも依頼を受けて『マクシミリアン・ハルデンの60歳の誕生日に』という文章を書いたが、結局公開しなかった。

1922年6月24日、長年の友人ラーテナウが殺害され、同年7月3日、ハルデン自身も右翼の旧軍人ら3名の襲撃を受け、頭部などに重傷を負う。1918年11月以降、ドイツでは右翼による襲撃が頻発しており、ハルデンは355番目の犠牲者であった。⁽¹⁰⁾ 同年行われた裁判では、当時の司法界の傾向通り、裁判長が犯人に露骨なまでに同情的であり、襲撃は殺人未遂とはみなされず、犯人のうち二人はそれぞれ4年9ヶ月と2年9ヶ月の刑、オーストリアに逃亡し、後に逮捕された残る一人も6年の刑を言い渡された。「未来」誌は1922年9月に廃刊となるが、ハルデンはその後もヨーロッパの各紙に記事を書き、カレルギー伯の汎ヨーロッパ運動を支持、ヒンデンブルク大統領批判、ヒトラー批判を行う。そして1927年スイスで66歳の生涯を閉じた。

トーマス・マンとマクシミリアン・ハルデン

トーマス・マンは、1890年代後半、すなわち10代後半に「未来」誌のハルデンの劇評を愛読し、ハルデンの文章からの抜書きを残している。⁽¹¹⁾ 1903年、彼の小品『飢えたる人々』と、兄ハインリヒの二つの短編の書評が「未来」に掲載された。翌年末、兄弟は初めてハルデンと対面、以後親交を結ぶ。特にトーマスの場合、ハルデンとの関係において、常に第三者が介在していたという点が特徴的で、このことが、過去のマン研究においてハルデンの存在が見過ごされてきた原因にもなったのである。

その第三者として最も重要な人物が、トーマスの義母で女優としての経験を持ち、ハルデンと親しかったヘドヴィヒ・プリングスハイムである。1900年から1921年までの彼女のハルデン宛の書簡が残されていたからこそ、今日われわれはマンとハルデンの関係について知ることが出来るのだが、マンが彼女に対して常に一定の距離を置いていたため、逆に彼女の存在がマンとハルデンのつながりを見えにくくしたという面があることも否定できない。1918年から1921年の日記の中で、マンは、義母や妻から伝え聞いたハルデンの意見や講演での人気ぶりに批判を加えている。⁽¹²⁾ 日記からも、当初義母を通して文壇の大物ハルデンに近づくことに意欲的だったマンが、ハルデンが反戦論者に転じてからは、この関係を疎ましく感じていたことがわかる。残された2つの草稿、1916年の『ハルデン』と1921年の『ハルデンの60歳の誕生日に』にもマンとハルデンとのつながりより、マンのハルデンに対する批判的距離が目立つ。

もう一人の第三者は兄ハインリヒである。1906年、マンの戯曲『フィオレンツァ』がリヒャルト・シャウカルによって酷評された時、兄は「未来」誌上で弟の作品を弁護した。⁽¹³⁾また、1907年オイレンブルク事件では兄弟で発禁処分を受けたハルデンに連帯する旨の声明を出した。⁽¹⁴⁾しかし、1914年の第一次大戦勃発を契機に兄弟の立場が分かれ、愛国主義者となった弟の、平和主義者の兄に対する批判は、1916年、愛国主義者から平和主義者に転じたハルデンにも向けられた。マルティンは、『ハルデン』の中で使われた表現が、当時執筆中であった『非政治的人間の考察』にも見られることを指摘し、『非政治的人間の考察』にハルデンの名が一度しか出ていないのは、トーマスの義母に対する配慮からであり、ハルデンは、『非政治的人間の考察』の中で、「表にこそ出ないが一定の役割を果たした」⁽¹⁵⁾すなわち、兄やロマン・ロラン同様、トーマス・マンにとっては重要な仮想敵であったとみなしている。確かにマルティンの指摘どおり、「文明の文士」ハインリヒの影に、もう一人の文士ハルデンが透けて見える。だが、マンにとってハルデンは果たしてそれだけの存在、兄の影に隠れてしまう程度の存在に過ぎなかったのであろうか。

続く第二章、第三章では、大全集に新たに収録されたマンのハルデンに関する2つの草稿を手がかりに、トーマス・マンとハルデンの関係について考察する。ヘルガ・ノイマン、マンフレート・ノイマンも、マルティンも、1922年4月以降の二人の関係については触れていない。そこで本論では、2本の草稿と『非政治的人間の考察』から射程距離をさらに延長し、『ドイツ共和国について』(1922)、クルト・トゥホルスキーの左翼雑誌「ヴェルトビューネ(Weltbühne)」、大全集に初めて収録された『ラーテナウ追悼の辞(Gedenkrede auf Rathenau)』(1923)を扱う。愛国主義者から平和主義者に転じたハルデンの軌跡が、謎の多い、マンの愛国的保守主義から共和国支持へのいわゆる「転向」に影響を及ぼしているかどうかを検討することが目的である。大全集の『ドイツ共和国について』の注釈では、マンの「転向」のきっかけとしてラーテナウ殺害事件しか挙げられていないが、その直後のハルデン襲撃もその要因とみなすべきではないか、というのが私の考えである。

第二章

1916年 サウロからパウロへ——草稿『ハルデン』と『非政治的人間の考察』

この草稿の成立時期については、過去に1922年1月という説と、1917年3月より前という説があったが、大全集の注釈本では1916年5—6月となっている。⁽¹⁶⁾これはマルティンの説に基づくものである。ハルデン

は、1916年5月6日「未来」掲載『真のウィルソン』において、戦争支持者から平和主義者に立場を変えた自分自身を、新約聖書「使徒行伝」のサウロのパウロへの転身にたとえた。マルティンはマンがその箇所を草稿に引用していることに着目して草稿の成立時期を割り出したのである。「未来」に掲載されたハルデンの一節を引用する。

サウロは倒れ、額に塵をつけながらも真昼のように輝かしい心でパウロとなって地面から立ち上がった
(中略)パウロの目から鱗が落ち、彼はこれまで何ヶ月も肉にささっていた棘を、彼の心を責めさいなんのでいた悪魔の下僕もろとも、意志の力を振り絞って引き抜いた、そしてすぐに洗礼を受けた。⁽¹⁷⁾

これをマンは『ハルデン』において次のように評した。

彼は常に自分を偽らず、作家として常に自分の本能に従ってきた、だがこれまで彼が従っていたのは第二の本能であり、戦争がもたらした「救済」とは、彼が、ついに自分の第一の本来の本能に従うように教えられたことにあった。それは救済であり、彼自身が述べているように、過去のプロイセン的なサウロから協商的なパウロへの宗旨がえであった。彼は何ヶ月も自分を苦しめてきた棘を抜き取り、自由になり、ついに本来の自分になったのである。⁽¹⁸⁾(下線による強調は千田。)

マルティンの指摘どおり、マンはハルデンのたとえを皮肉をこめて借用しているが、展開の仕方がいかにもマンらしい。『ハルデン』において「過去のプロイセン的なサウロから、協商的なパウロへ」とまとめられている「第二の本能」と「第一の本能」(別の箇所では「彼の傾向」と「彼の本質」)の対立図式は、この文章全体では、国家間の対立から理念の対立へと拡大されている。サウロ側には、「ドイツ」「反民主主義」「ニーチェ」「ビスマルク」「反議会主義」「貴族主義」「審美主義」「封建主義」「愛国主義」「ナショナリズム」、パウロ側には、「西欧」「進歩的民主主義」「自由主義」「ウィルソン」「文明の文士」「文学と政治の融合」「キリスト教徒」「モラリズム」「ヒューマニズム」が並ぶ。これらの対立図式そのものは、当時のドイツのナショナリズム思想の常套句であった。ただし、一つ注意すべき点がある。マンは、一見サウロ側についてパウロ側を批判しているように見えるが、実はよく読むと必ずしもそうは言い切れないのである。

ハルデンが「サウロからパウロへ」という比喻を用いて愛国主義者から平和主義者への自分の立場の逆転を描写したとき、彼は自分の「回心」を、ドラマチックな宗教体験のごときものとして描いた。しかし、マ

ンは、サウロからパウロに転じた後のハルデンに、一貫して変わらない特質を見ている。それは、ニーチェの貴族主義である。しかもマンは、その貴族主義こそが、ハルデンをサウロからパウロに変えた、と考えるのである。

彼の教養、若い頃の経験はドイツ的であった。彼はニーチェの影響を受けている。彼はビスマルクに近かった。彼の変節は、貴族的であり(中略)世論が支持することに反対したのである。反ドレフェス主義。これが繊細で審美主義的な起源を持つ彼の貴族主義であり、反民主主義である。彼にとって、世論や手垢にまみれたスローガン、その口臭は耐え難いものであった。彼の感性はコリオラン的であった。

(中略)かつて世論に対し、彼に吐き気を催させたのと同じ審美主義が、今度もまた下卑た国民感情に対する彼の反抗心に働きかけた。なぜなら、一般的なものは卑賤なものだからである。⁽¹⁹⁾(下線による強調は千田。)

ドイツの国民感情に対するニーチェ的な反発から、シェイクスピアの悲劇『コリオレーナス』の、ローマ市民を軽蔑する主人公のごとく、ハルデンはあえて国民感情に背を向けてウィルソンを支持するに至ったのだとマンは言う。コリオレーナスについては『非政治的人間の考察』の「政治」の章の民主主義批判の中でも言及され、⁽²⁰⁾また、サウロからパウロへの回心は、「自省」の章でも触れられている。⁽²¹⁾「自省」の章において、マンはニーチェを、ドイツの芸術と批評を融合させ、軍国主義や権力哲学と同程度に進歩的な文明を促進する影響を与えてきた人物と評し、ショーペンハウアー、ワーグナーと同様、ドイツ的というよりヨーロッパ的で、それゆえにこそドイツ的な存在とみなしている。しかも「自省」という表題が示す通り、マンは彼ら「精神の三連星」に自分が受けた感化を語るにより、自分にも、ドイツ的な側面とヨーロッパ的な側面があることを認めている。そこに、あえて名は伏せつつ間接的にはあるがニーチェに追随する「凡人」として、ハルデンの「サウロからパウロへの回心」をとりあげるマン。マルティンの推測どおり、草稿『ハルデン』と『非政治的人間の考察』の「自省」の章が、同時期すなわち1916年5月から6月に成立したのだとすれば、マンはハルデンが「文明の文士」ハインリヒの側についたことを皮肉をこめて揶揄する反面、自分とハルデンとの共通点を、ニーチェの貴族主義というキーワードで捉え、ハルデンの「回心」をもそのキーワードによって理解しようとしていたと結論づけられるだろう。つまり、1916年当時マンにとってハルデンはハインリヒ側に寝返った単なる「文明の文士」ではなかった、同じニーチェの徒として、矛盾する二つの

面を持つ、マン自身に近い存在でもあったのである。

1921年 草稿『マクシミリアン・ハルデン60歳の誕生日に』

1921年10月21日のハルデン宛の手紙に付された『マクシミリアン・ハルデン60歳の誕生日に』ではどうか。1916年の『ハルデン』と比較すると、ハルデンの、ワーグナーとニーチェの徒から、ウィルソン信奉者へ、貴族的保守的人物から、民主主義的文士の政治家への転身が、サウロからパウロへの回心のたとえで語られている部分は、『ハルデン』と同じである。ただし、目を惹くのは、ハルデンが自分を敵とみなしており、自分もハルデンに反感を抱いている、という前置きの後、第一次大戦中自分自身を求めて戦った点、精神を有するがゆえに、愛国的な民族主義に同調できず孤立している、という点で、自分とハルデンは共通している、とマンが語っていることである。草稿の、宣戦布告のごとき冒頭部分、草稿を作ってはみたものの「メルクール (Mercur)」誌に載せるつもりはない、というマンの日記の記述、⁽²²⁾まだ和解していないマン兄弟の、兄の祝辞は掲載され、弟の祝辞がなかったことをハルデンが残念がったと知り、弟も草稿を付した手紙を送ったものの、その手紙でハルデンの誕生日の日付を間違えたこと、⁽²³⁾等の事実だけを並べてみると、マン兄弟とハルデンの関係は、必然的に、兄とハルデン対弟という構図にならざるを得ない。マルティン、ヘルガ・ノイマン、マンフレート・ノイマンもそのように見ている。⁽²⁴⁾なるほど戦争が終わっても、ハルデンとの和解はなかった。しかし一方では、対立する二つの理念の葛藤を抱えつつ、国民感情にあえて背を向け、孤立する存在、というハルデンのあり方にマンが共感していることを見逃してはならない。さらにまた、距離を置く対象が、マンの場合『ハルデン』の民主主義から愛国的民族主義にかわっているところには時局の変化、いやむしろマン自身の変化、ハルデンへの歩み寄りを見ることも出来るのではないか。

この草稿に先立って1921年6月から8月に書かれた『ゲーテとトルストイ』においては、マンが自分とハルデンの共通点として挙げた「貴族性」が、シラーとドストエフスキーに対するゲーテとトルストイの特質として論じられている。また、マンは自分とハルデンの内にある対照的な二つの性向の葛藤を、2つのハルデン論と『非政治的人間の考察』の中で「傾向」と「本質」というレトリックを用いて表現したが、『ゲーテとトルストイ』において、同じレトリックが「傾向」と「存在」という言葉で、「精神」へ向かおうとする「自然児」ゲーテとトルストイの努力を論じている箇所に応用されている。

ある種のユーモアからやってみようということがある、トルストイのキリスト教的なところと、ゲーテの人文

性が覆い隠している人種的国民性のたくましい核を示すこと、言い換えれば、彼ら二人の貴族主義の真正を示すことである。というのは、民族的に真正なるものは、自然的で貴族的だからだ。この場合、キリスト教や人文主義や文明などは、同一の精神的民主主義的な反対原理を成す。そして、精神化の過程は同時に民主主義化の過程なのである。トルストイが適切にも自分の「民主主義的傾向」と名づけたところのものは——適切にも、と言ったのは、傾向という言葉はある方向、ある意志を言い表し、ある努力を意味するのであって、存在を意味しないからである——ゲーテのうちにも時折ははっきりとその存在を示しているからである。(中略)世人の間に立ち交じり、他人と肩を並べ合い、人並みに、大衆の中で生活することが、ゲーテには幸福だと思われる。(中略)彼はヴェネチアを支配者の記念碑としてではなく、民衆の記念碑として讃える。しかし紛れもなくここには、本来の調子よりもむしろ修正的な調子が現れている。ゲーテはこんな具合に自己のゲルマン的・プロテスタント的貴族主義を自己批判によって修正している。したがってそれは「傾向」であり(後略)。(25)(イタリックはマン、下線は千田による強調。)

1921年にこの箇所が書かれたという前提の上での推論だが、(26)マンの「貴族主義」は、1916年から21年の間に、ニーチェ、ショーペンハウアー、ワーグナーそしてハルデンから、ゲーテとトルストイにまで敷衍され、第一次大戦中から戦後のドイツにおけるさまざまな価値観や主義の潮流に押し流されそうになるマンにとって、一種の精神的な命綱の役割を果たしたのではあるまいか。保守革命思想家たちが集う六月クラブとの交流と雑誌『良心』の購読、(27)その一方で、後で触れる左翼系雑誌『ヴェルトビューネ』との関わり。マンはその中で、常にこの命綱を握り締め、時局の変化に流されないようにしながら、もう一方の手で進むべき方向を探っていたのではあるまいか。その最もアクロバティックな例を、1922年7月から8月に執筆され、マンの「転向」すなわち共和国支持が明確に打ち出された『ドイツ共和国について』の中に見ることが出来る。

君たちは最近『マイスタージンガー』を聴きましたか。さてニーチェはこれを「反文明」であり「ドイツ的なものをフランス的なもの」と対置していると激しい言葉で評しています。しかしこれこそ民主主義、徹頭徹尾民主主義なのです、ちょうどシェイクスピアの『コリオレーナス』が貴族的であるのと同じくらい民主主義的なのです。これはいわばドイツの民主主義で…(28)

まるでマンは、自分が発する「民主主義」という言葉に、聴衆のみならず自分自身も払拭しきれずにいる違和感を、過去に何度も言及してきたワーグナーの『マイスタージンガー』、ニーチェのワーグナー論、シェイクスピアの『コリオレーナス』の貴族性、そして「ドイツの」という形容詞でこの言葉を幾重にも取り囲むことによって薄めようとしているかのようである。これらはすべて、過去のマンの著作において「民主主義」批判の文脈で用いられてきたものであり、『マイスタージンガー』がなぜ「徹頭徹尾民主主義」的なのか、根拠付けはなされていない。「民主主義」という言葉がここでは不自然に浮いてしまっている。だが、1922年夏、マンはあえてこのような無理をしてまで民主主義擁護、共和国支持を表明せずにはいられなかった。メラール保守派と袂を分かち、「まだよくまわらぬ舌で『共和国万歳!』と叫ばずにはいられなかったのである。(29)既に触れたように、そして『ドイツ共和国』の中でも言及されているように、このマンのいわゆる「転向」の裏には、右翼によるラーテナウ殺害があった。だが、それだけであろうか。6月24日のラーテナウ殺害に続く、7月3日のハルデン襲撃も影響していたのではあるまいか。

第三章

トゥホルスキーの「ヴェルトビューネ」におけるラーテナウ事件とハルデン事件

AEG創始者の息子にして文化人、外相ラーテナウと、雑誌「未来」の編集者ハルデン。1922年の夏に相次いで右翼の襲撃の犠牲となったこの二人のユダヤ人は、1897年から親しく交際する間柄であったが、戦前のオイレンプルク事件や植民地政策をめぐる意見の対立、戦後のラーテナウの政治的上昇とハルデンの孤立に由来する不和から、1920年4月以降、関係は途切れていた。(30)ラーテナウ殺害事件後、7月1日、ハルデンは「未来」に追悼の辞を載せた。トーマス・マンは7月8日のベルトラム宛の手紙でラーテナウ事件のショックを語り、『ドイツ共和国について』の執筆を開始、(31)さらに1年後、1923年6月24日ミュンヘンで行われ、エーベルト大統領も出席したラーテナウ追悼式では『ラーテナウ追悼』を講演した。しかし、日記が焼却されたため、ハルデン襲撃事件について彼が書き記したものは残っていない。外相の殺害事件の衝撃の大きさについて、ここで改めて論じる必要はないであろう。問題は、ラーテナウ殺害事件の影に隠れて忘れられたかにみえるハルデンの襲撃事件が、当時世間でどのように受け止められたかである。

この事件の衝撃が、ラーテナウ事件同様大きかったことは、「ヴェルトビューネ」にクルト・トゥホルスキー

が掲載した風刺詩や報告から伺い知ることが出来る。彼が批判の矛先を向けたのは、右翼政治家ルーデンドルフ、ヘルフェリヒ、重工業家、大農場主、役人、国民人民党、ドイツ人民党、愛国秘密結社、そしてナチスである。(32) 6月29日掲載の『ラーテナウ』という詩は、「家々にハーケンクロイツを描きなぐり、共和国を妨害する君主制主義の裁判官や将校たち、共和国を喰いものにすやくざたちを放り出せ。」(33)と、激しい抗議声明になっている。さらにハルデン襲撃事件直後の7月13日掲載『ハルデン』という詩では、「ぼくにはもはや——わかってもらえるだろうが——/襲撃事件が起きる度に追悼の小唄をくちずさむことはできない。/これじゃあんまり多すぎる。」(34)と歌った。「ぼくたちは、指導者が次から次へと銃弾に襲われ、強打を浴びせられ、水に投げ込まれ、裸にされるのを、何もせずに傍観していることはできない。」(『ドライな反乱』7月16日)(35) 1919年1月のリープクネヒト、ルクセンブルク殺害、1921年8月のエルツベルガー暗殺、そしてヴィルト首相に「敵は右翼にいる」といわしめたラーテナウ事件、ハルデン襲撃事件など、1919年から22年まで右翼のテロが頻発した背景には、帝政時代から人的配置がかわらなかった司法官の右翼への肩入れの影響があった。一方ではトラー、ミューザムら左翼に対する厳罰、一方ではリープクネヒト、アイスナー、エルツベルガー、ランダウアー殺害犯、そしてハルデン襲撃犯の裁判の例に見られる右翼への軽い刑。トゥホルスキーはハルデン襲撃犯の裁判を「ヴェルトビューネ」で取り上げ、10月26日、裁判の不当性を告発する詩を載せた。「ぼくらはもうお前たちを信用しない、お前たちの天秤を。——そいつは傾いている！誰の目にもそれは明らかだ。」(『この裁判に向けてのいくつかの意見』)。(36)「僕らはもはや司法をもたない。」(『ハルデン裁判』12月21日)。(37)

既にのべたようにトーマス・マンは1922年以前からこの「ヴェルトビューネ」と関わっていた。マンの『ゲーテとトルストイ』の草稿の一部は1921年10月にこの雑誌に掲載されている。(38) 当時のマンは『マクシミリアン・ハルデン60歳の誕生日に』を執筆しており、『非政治的人間の考察』の保守主義の延長線上にいたが、同時期に書かれ、ユダヤ人である妻カーチャの勧めにより結局公にされずに終わったエッセイ『ユダヤ人問題によせて (Zur jüdischen Frage)』には、「ハーケンクロイツの騒動」(39)というナチス批判の言葉が初めて使われている。既に述べたが、ハルデンに関する1921年の草稿にも、「民族主義的な教授たちの中にすら、精神を有する者の場合、愛国的な告白でもって仲間に入れてもらうことは出来ない」(40)という一節がある。

保守主義者であったマンが、民族主義者との間に一線を画した背景には、当時の反ユダヤ主義的風潮に対する距離感があったと推測される。トゥホルスキーは

1922年3月、アドルフ・バルテルス著『現代ドイツ文学。最新版』を取り上げ、ユダヤ人であるか否かによって作家をランクづけする著者を皮肉っている。この本の著者がマン兄弟に対し「ポルトガル人の母親を持つがゆえに、ユダヤ性に近づいた兄弟」(41)というレッテルを貼っていることから、当時の反ユダヤ主義の異様な高まりが伺える。マンが『ユダヤ人問題に寄せて』を公にすることを控えたのもこの反ユダヤ主義的風潮と無関係ではあるまい。ラーテナウ殺害とハルデンへの襲撃もそのような風潮の中で起こったことを考えれば、ヴィルト首相のみならず、マン自身、「敵は右翼にいる」という危機感を抱いたことは間違いない。

1922年の『ドイツ共和国について』から1年後、1923年の『ラーテナウ追悼』の草稿には、次のような一節がみられる。

まだわが国で生きながらえているように見える、君主制主義的軍国主義的改革への期待感、急激に滅び去る定めにあると、我々は確信を持って請合うことが出来ます。(42)

聴衆が『ドイツ共和国について』の場合のような保守的な若者ではなく、追悼式を企画した共和国支持派の学生であることを割り引いて考えても、トゥホルスキーを思わせる厳しい保守派批判である。

ただし、マンはこの講演でもあくまでニーチェとゲーテという彼の命綱を離さない。マンは、この命綱を握りながら、一方では左翼に近づきつつ、もう一方では右翼の心情に理解を示す。次の一文は、マンがハルデンを論じた2つの草稿、そして『ゲーテとトルストイ』において用いた「傾向」と「本質」あるいは「存在」の関係というレトリックのさらなる変奏である。

共和国思想がドイツで遭遇する最も根深い抵抗は次のことに由来する、すなわち、ドイツの市民と人民が、政治的要素を今まで一度も彼らの教養概念に取り入れたことがないところ、(中略)内面性から客観性へ、政治へのヨーロッパ諸国民が「自由」と読んでいるところのものへの移行が求められたとき、それを自己の本質の歪曲の要求、民族性の放棄そのものと感じるところに。(43) (下線による強調は千田。)

ドイツ対ヨーロッパ、内面性対客観性、教養対政治、民族の本質とその放棄、という対立項は保守主義者にとってなじみ深いものである。だが、この講演には、ドイツ人の「本質」の中に、共和国思想をも取り込もうとするマンの強い意志が見られる。マンは、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』が「個人的冒険的な自己陶冶ではじまり、政治的ユートピア」で終わることを挙げ、共和国は単なる政治ではなく、「国家と文化

の統一」であり「人文主義」であると語る。そして、ドイツの若者の反啓蒙主義を憂えつつも、「ゲーテ、ヘルダーリン、ニーチェ」を生んだ国であるから絶望するには及ばないと締めくくる。ハルデン襲撃事件から1年後、ドイツ的共和国の理想を語り、ハルデンに続く道を大きく踏み出したマンの拠り所は一貫してニーチェとゲーテなのである。

おわりに

1921年以降、マンとハルデンの直接のつながりを示す記録はない。だが、暴力的にエスカレートする反共和国思想や反ユダヤ主義、司法の右傾化という風潮が、ラーテナウ殺害、ハルデン襲撃、そしてそれに続く不当な裁判という具体的な形で目の前に突きつけられたとき、マンがそれを我が事のごとく受け止めたことは十分想像できる。ハルデンは、マンが10代の頃から憧れてきた文筆家であり、身内同然に付き合い、戦争中は自分の中の傾向と本質の相克に悩むニーチェの徒として、反発しつつも共感できる存在だったのだから。

1922年夏、ラーテナウを失い、ハルデン襲撃を知った直後、マンは『ドイツ共和国について』を構想する。その際彼は当然自分の『非政治的人間の考察』を支持した六月クラブのメンバーら保守派たちや暴力的右翼からの猛反発を予想したであろう。その時マンは、あえて時代の思潮に背を向けるハルデンの「貴族主義」を、わが身にもあてはめたのではあるまいか。『非政治的人間の考察』も『ドイツ共和国について』も、ゲーテ、ニーチェを精神的基盤として孤高の道を選ぶという姿勢では一貫している。その意味で、マンのいわゆる「転向」は、本人にしてみれば、ハルデンの「サウロからパウロへの回心」場合と同様、あくまでも「自己発見」だったのである。

本論は、作品以外のマンの著作物からマンとハルデンの関係を扱っているが、ハルデンの著作や「未来」の記事からのアプローチを欠く。また、マンの創作の中にハルデンという人物が投影されているか否か、という問いにも答えていない。この2点に関しては、機会を改めて論じたい。

註

トーマス・マンのテキストは、以下のものを使用した。
Große kommentierte Frankfurter Ausgabe, Werke-Briefe-Tagebücher. Essays II.
 Hrsg.v.Heinrich Detering u.a. Frankfurt a.M.2002.〔以下Essays IIとする。注釈本は、Essays II.Kommentarとする。〕
Essays. 6 Bde. Hrsg.v.Hermann Kurzke u.Stephan Stachorski. Frankfurt a.M.1993-1997.
Betrachtungen eines Unpolitischen.
 In: *Gesammelte Werke in Einzelbänden.*
Frankfurter Ausgabe. Hrsg.v.Peter de Mendelssohn. Frankfurt a.M.1983.〔以下 *Betrachtungen*とする。なお引用箇所翻訳にあたり、前田敬作、山口知三訳『非政治的人間の

考察』全3巻、筑摩書房(1985)を参照した。〕
Tagebücher 1918-1921. Hrsg.v.Peter de Mendelssohn. Frankfurt a.M. 1981.
Notizbücher 1-6. Hrsg.v.Hans Wysling u.Yvonne Schmidlin. Frankfurt a.M.1991.〔以下Notizbücherとする。〕

- 1) Frank Wedekind, Thomas Mann, Heinrich Mann Briefwechsel mit Maximilian Harden. Hrsg.v.Ariane Martin. Darmstadt 1996.〔以下Briefwechselとする。〕
- 2) Ariane Martin: Schwiegersohn und Schriftsteller. Thomas Mann in den Briefen Hedwig Pringsheims an Maximilian Harden. In: Thomas Mann Jahrbuch Bd.11. Hrsg.v.Eckhard Heftrich u.Thomas Sprecher. Frankfurt a.M.1998.
- 3) Helga Neumann/Manfred Neumann: Maximilian Harden (1861-1927). Ein unerschrockener deutsch-jüdischer Kritiker und Publizist. Würzburg 2003.〔以下Neumannとする。〕
- 4) In: *Die Zukunft* vom 1.8.1914. Neumann, S.149.
- 5) In: *Die Zukunft* vom 8.8.1914. Neumann, S.149.
- 6) In: *Die Zukunft* vom 22.4.1916. Neumann, S.153.
- 7) In: *Die Zukunft* vom 6.5.1916. Neumann, S.153.
- 8) In: *Die Zukunft* vom 27.5.1916. Neumann, S.153.
- 9) Briefwechsel, S.162.
- 10) Neumann, S.170.
- 11) *Notizbücher*, S.19,24-27.
- 12) *Tagebücher*, 5.10.1918. S.26.
- 13) Neumann, S.57.
- 14) Ebd., S.112.
- 15) Ebd., S.79.
- 16) *Essays II, Kommentar*, S.69.
- 17) Briefwechsel, S.162. なおハルデンは、「サウロからパウロへの回心」という喩えを、1918年の『戦争と平和』ではパーク、ラマルティエヌ、リュッケルト、フィヒテのナショナリズムに対して「パウロがサウロになった」と、全く逆の方向でも用いている。
 Maximilian Harden: *Krieg und Friede.* Bd1. Berlin. 1918. S.121.
- 18) *Essays II*, S.150.
- 19) Ebd., S.147f.
- 20) *Betrachtungen*, S.368.
- 21) Ebd., S.86.
- 22) *Tagebücher*, 12.10.1921, S.549.
- 23) Briefwechsel, S.160. 10月20日のハルデンの誕生日をマンは11月20日と書いている。
- 24) Briefwechsel, S.41. Neumann S.74.
- 25) *Essays II*, S.883.
- 26) 1921年の講演原稿にはこの箇所はない。初出は1925年9月の「ヨーロッパ・レビュー (Europe Review)」誌で、同年のエッセイ集「労苦 (Bemühungen)」に収録された。だが、マンが1921年に講演原稿のほぼ倍の量の原稿を書き、未発表分を小分けして新聞や雑誌に発表したこと、当初の講演ではゲーテ、シラー、トルストイ、ドストエフスキーの4人の対比がなされる予定だったが、ゲーテとトルストイの2人に絞られた、そしてこの箇所はゲーテとシラーが対比されているので、当初の構想に基づいていること、参考文献としてビルショフスキーの「ゲーテ」が用いられていることから、この箇所は21年に書かれたと私は推測する。
 Herbert Lehnert u.Eva Wessel: *Nihilismus der men-*

- schenfreundlichkeit. Thomas Manns "Wandlung" und sein Essay *Goethe und Tolstoi*. Thomas-Mann-Studien 9. Frankfurt a.M. 1991. S. 231.
- 27) フリッツ・スターン『文化的絶望の政治——ゲルマン的イデオロギーの台頭に関する研究』中道寿一訳 三嶺書房 (1988) 294-307頁。
- 28) Essays II, S. 529.
- 29) Ebd., S. 559.
- 30) Neumann, S. 162.
- 31) Essays II, Kommentar, S. 345.
- 32) Kurt Tucholsky: Gesammelte Werke Bd1. Hrsg. v. Mary Gerold-Tucholsky und Fritz J. Raddatz. Hamburg 1972. S. 983.
- 33) Ebd., S. 988.
- 34) Ebd., S. 998.
- 35) Ebd., S. 1001.
- 36) Ebd., S. 1065.
- 37) Ebd., S. 1078.
- 38) Lehnert: a. a. O., S. 229. 『ゲーテとトルストイ』の1921年版と1925年版の違いを研究し、マンとリング・クライスとの
- 関係を丹念に追った友田和秀氏は、講演原稿が「六月クラブ」メンバーが編集する「ドイチェ・レントシャウ (Deutsche Rundschau)」1922年3月号に掲載されたことを重視し、マンと保守革命との思想的類縁性の根拠としているが、講演原稿と同時に書かれた未発表原稿が様々な新聞、雑誌に掲載され、その雑誌に「ヴェルトビューネ」も含まれていること、このエッセイを扱う場合、1921年版と1925年版の比較のみならず、1921年の時点で書かれ、1925年版に収録された未発表原稿の存在を考慮する必要があることを、ここで指摘しておきたい。
- 友田和秀『トーマス・マンと一九二〇年代—「魔の山」とその周辺—』人文書院 (2004) 116頁。
- 39) Essays II, S. 436. Kommentar, S. 287.
- 40) Ebd., S. 426.
- 41) Tucholsky: a. a. O., S. 920.
- 42) Essays II, Kommentar, S. 424f. ただし草稿のこの箇所は棒線で削除されている。
- 43) Essays II, S. 769.
- 44) Ebd., S. 685.